

# 対面授業での感染対策と情報保障支援

対面授業やキャンパスライフでは、感染防止の対策としてマスクの着用が求められますが、一方で、聴覚障害学生のコミュニケーションの面では、マスクで口元や表情が見えないことが大きなバリアとなり得ます。また、教室に定員を設定したり座席指定がされるために隣に座ることができなかったり、席の間隔を空けたりするため隣席での情報保障支援ができない、補聴用のマイクや入力用のパソコンなど支援用の機器を共有できないといった問題も生じます。

十分な感染対策を講じるとともに、聴覚障害学生が安心して授業やコミュニケーションに参加できるかどうかという視点を忘れず、環境づくりをすることが求められます。

## ■対面での感染対策の基本的な考え方

マスクの着用がバリアになるとは言え、聴覚障害学生への配慮ということでマウスシールドやフェイスシールドのみで近距離で会話をするのは、感染対策として不十分であると指摘されています。感染対策とコミュニケーションの確保を両立するポイントとして、以下のような方法や注意点が挙げられます。

- ・話し手(授業を行う教員など)は透明マスク等を着用し、顔周りがしっかり覆えるサイズのアクリル板を前方に置く(二重にすることで感染予防効果が向上する)
- ・アクリル板は、話し手がしっかり覆われ、且つ反射が少なくなるよう設置位置(話し手の立ち位置)に留意する
- ・話をしない参加者(授業に出席する学生など)はマスクを着用する
- ・話し手と学生との間は十分な距離(2メートル以上)をとる
- ・教室内は、常時、対角線上に窓を空けておくなど室内の換気を徹底する
- ・これらの方法が十分に取れない環境の場合は、テレビ会議システムを活用するなど、遠隔で実施できる方法を検討する



©PEPNet-Japan

※イラストではフェイスシールドを使用していますが十分な距離が取れない場合は透明マスクを推奨します

### ■コミュニケーション確保のための留意点

上記のような対策・工夫を行った際、しばしば聞かれる問題点として、「どの透明マスクを選べば良いかわからない」「透明マスクが曇ってしまい効果がない」「アクリル板を使うと反射して相手の顔が見えにくい」といったことが挙げられます。こうした問題を軽減するための方法をいくつかご紹介します。

#### ・透明マスクの選び方

聴覚障害者のコミュニケーションや医療現場・教育現場での活用を想定し、さまざまな透明マスクの商品が開発・販売されています。鼻や口元がしっかり覆われ隙間なく装着できるもの、防曇加工されているもの、息苦しさが少ないもの、凹凸が少なく反射しづらいもの、といった視点で選ぶとよいでしょう。

#### ・反射による見づらさへの対策

アクリル板の反射による見づらさを抜本的に解決するのは難しいですが、座席位置の工夫でできるだけ見やすい席を確保できるとよいでしょう。また、口形を見ることだけに頼らず済むよう、情報保障支援や、板書を増やすなどの十分な授業進行の配慮を組み合わせることも重要です。

### ■手話通訳を行う場合の留意点

手話通訳は透明マスクなどで表情が見えるようにします。可能な場合は、先生と通訳者のあいだ、通訳者と学生の間にもアクリル板が設置できると良いですが、ない場合でも、先生や学生との距離を十分に保つよう、通訳者の位置の調整が必要です。

また、対面授業であっても、遠隔地から手話通訳を行う方法も考えられます。教室の環境上、通訳者と十分な距離を保ち、密を避けることが難しい場合は、遠隔支援の導入も検討してください。



©PEPNet-Japan

※立ち位置によって、教員と通訳者の間にアクリル板を置いたり通訳者が透明マスクをつけるなど十分な対策が必要です

### ■ディスカッションや話し合い場面での留意点

聴覚を活用したり、口形を見て理解の手がかりとする聴覚障害学生が参加する場合は、口元が見えるような工夫があると助かります。前述のように、お互いの距離をとりつつ透明マスクやアクリル板を活用するとよいでしょう。

そうした配慮に加え、文字通訳を行ったりチャットを使う場合は、入力のためのパソコンを共有せず、各学生がそれぞれのパソコンを使うようにします。

補聴援助システムを利用する場合、従来は補聴用のマイクを話し手が持ち、話し手が交代するときにはマイクを回すという方法が一般的でした。

感染対策上、機器の共有を避けたい状況下では、卓上タイプのマイクを活用したり、マイク席を決め話し手がその席に移動すると



©PEPNet-Japan

いった、方法の変更が求められます。

また、対面であっても参加者それぞれがテレビ会議システムにログインし、画面上でディスカッションをするという方法もあります。十分距離をとって着席できる状況であれば、発言時はフェイスシールド等を使い口元が見えやすい状態で発言できたり、チャットなどの文字ツールを併用して参加者全員が文字情報を共有できるといったメリットもあります。

また、聴覚障害学生によっては、ヘッドフォンを使ったり、パソコンに補聴援助システムを接続することで、対面よりも聞きやすい環境を得られる場合もあります。外付けマイクを使用するなど、言葉を明瞭に届けられるよう工夫しましょう。

(個人差があり、パソコンを通した音の方が聞きづらい人がいたり、通信状況が悪いと雑音が増えて聞きづらくなる人もいますので、十分な確認の上で活用してください)

### ■接触感染対策の工夫

ディスカッションでの対策としても述べた通り、ノートイク用のパソコンやタブレット、ペン、補聴援助機器などは、複数名が共有せずに済むような運用を考えることが大切です。やむを得ず共有する場合は、使用後にアルコール消毒を徹底するなど、感染対策のルールを決めしっかりと運用することが必要です。電子機器やアクリル板等は、素材によって使用可能な消毒液が限定されている場合があるので、注意してください。

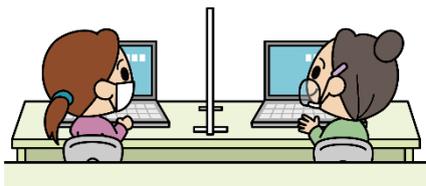
### 【参考】Phonak COVID-19(新型コロナウイルス感染症)関連情報

オンラインでの補聴システムの活用方法のほか、感染対策に関する情報や手話・字幕付き動画、関連サイトへのリンク集も掲載されています。

<https://www.phonakpro.com/jp/ja/remote-audiological-support-covid-19.html>

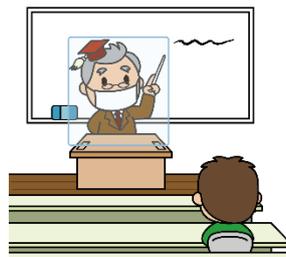
### ■アクリル板の活用

アクリル板の使用は、他の感染対策と組み合わせることにより感染防止の効果も高まります。聴覚障害学生にとっては、感染対策をとりながら視覚的な情報を得られる環境整備の一助ともなります。以下に、活用例や使い方、選び方に関する情報を掲載します。



©PEPNet-Japan

教室内で、支援者と利用者との間での感染対策として



©PEPNet-Japan

授業担当者と学生との間での感染対策として



©PEPNet-Japan

支援室の窓口や面談時の感染対策として

### 自立型・設置型のもの

左右もガードできるタイプは、口元が見えるようフェイスシールドを使う時などに、併用すると安心です。

写真(左)のように受付カウンターなどでも使えるように下にスペースが空いているものもあります。



### 持ち運び可能な軽量のもの

薄くて軽量のものは、自立しにくいですが持ち運びがしやすく、授業や支援の際の移動がラクです。

脚のないものや、脚が小さく不安定な場合は、ブックエンドとクリップで安定した自立型にできます。

教室に持ち込んでからも簡単にセッティングできます。



**【注意】**素材によって、消毒の方法が異なります。アルコール消毒すると白くなったり劣化したりする場合がありますので、必ず各商品の取扱説明書に従って扱ってください。

- 発行日：2021年9月20日
- 更新日：2022年5月2日
- 執筆：中島 亜紀子(筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター)
- 編集：日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan)事務局
- 発行：筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター  
〒305-8520 茨城県つくば市天久保 4-3-15 TEL/FAX 029-858-9438  
E-mail:pepj-info@pepnet-j.org URL <https://www.pepnet-j.org>

※本事業は、筑波技術大学「聴覚障害学生支援・大学間  
コラボレーションスキーム構築事業」の活動の一部です。



国立大学法人  
筑波技術大学

PEPNet-Japan